



Title	認知言語学的アプローチによる多義語指導の実践と学習者の認知 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	三ツ木, 真実
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第13189号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70663
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Makoto_Mitsugi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：三ツ木 真実

審査委員	主査 教授	河 合 靖
	副査 特任教授	園 田 勝 英
	副査 教育学院教授	長 野 督
	副査 名誉教授	佐 藤 俊 一

学位論文題名

認知言語学的アプローチによる多義語指導の実践と学習者の認知

本論文は、認知言語学研究の知見を適用した英語多義語学習の指導法の効果検証を目的とする研究の報告である。多義的意味を持つ前置詞を取り上げて、多義語の中核的意味概念（コア・ミーニング）やそれを図示したイメージ・スキーマの使用により、英語と日本語の語義1対1対応の意味理解から生まれる学習の困難さの解消が見られるか検証している。この研究分野は、応用認知言語学と呼ばれて近年発展してきているが、先行研究で得られる知見が拡散する傾向にあると著者は指摘している。また、認知言語学では母語話者が持つ多義的な語彙概念の体系的な理解と図式化に興味があるので、その応用としての多義語学習指導ではその母語話者の意味概念を第2言語学習者に受容させることに関心が向きがちである。著者は、第2言語学習者の側の目標言語の多義的語彙概念理解に対する研究が不足していると指摘し、その重要性を主張している。

先行研究のレビューにもとづいて、本研究では（a）多義語学習プロセスで生じる問題の低減、（b）学習者の意味処理を促す多義語指導法の開発と効果検証、（c）指導効果の違いに影響する具体的要因の探索を課題としている。これらを明らかにするため、2つの研究が実施されている。研究の結果から、著者は次の知見を得たと主張する。まず、コア・ミーニングの理解とこれを多義語の学習に適用する際の見なしの原理と意味的動機づけへの習熟、ならびにコア・ミーニングと拡張された意味との関連を明示的に指導することで、多義語学習プロセスで生じる問題が低減し、その指導法の効果が実証的に支持されたとしている。また、見なしの原理を用いやすい空間的、あるいは時空間的な見立てを行う前置詞では指導法の効果が高かったが、抽象度が高くなるにつれて見なしの原理を適用することが困難になると著者は指摘している。さらに、コア・ミーニングを用いることによって新たに生じる学習の困難点についても着目している。以上から、著者は、認知言語学的知見を多

義語学習に適用する指導法のさらなる改善と、学習者の多義的語彙知識の発達を学習者の認知の視点から見ていく研究が必要であるとしている。

本論文について、研究成果の意義、方法論的貢献、教育への示唆の3点から審査した。その結果、審査委員は、次の点において本論文の意義を認めるものである。

1) 著者はコア・ミーニングの使用だけではなくて、見なしの原理の指導などを含んだ明示的な指導の必要性を主張している。これまで拡散的だった応用認知言語学研究における1つの方向性が提示されていると評価する。2) 学習者の側の学習過程の認知処理を設問ごとに細かく質的に分析している研究手法は、この研究の分野においては新規性がある。3) 明示的指導に必要な指導効果をもたらす要因ばかりではなく、効果の阻害要因も新たに指摘することで、応用言語学的な研究の発展への道筋を示したのみならず、指導上の留意点をも示唆できる研究となっている。

本論文の審査において、以下の問題点も指摘された。第1点として、質的分析の研究方法に関する記述不足や、分析の際のカテゴリー化の精緻化など、学習者の認知処理に関する分析では課題が残る。第2点として、コア・ミーニングの抽出方法や語源とコア・ミーニングの違いなど研究の主要な概念に関する説明に緻密さが欠ける。第3点として、学習者の第2言語習熟度の影響やコア・ミーニングの利用以外の方略使用の状況も含めた包括的な学習者の認知処理についての考察が不十分である。1点目については、研究の再現性の点から本研究の欠点とは言えるが、今回の結論を導くうえで質的研究として大きな問題があったとは言えないので、今後研究技能を高めていくことで解決が期待できると判断した。2点目については、口頭試問の質疑応答で妥当な回答がなされており、これについてもこれからの研鑽により研究者としての資質を高めていくことで解決すると思われる。第3点目については、本研究は認知言語学的な視点からの研究としてコア・ミーニングの利用に焦点を絞っており、議論の一貫性の観点から学習者の方略使用については記述が少なくなっているが、今後学習者の認知処理についてより包括的に研究を進める上での課題であると判断する。

以上、本学位論文の審査委員は、本論文が学術的意義を持つとともに英語教育への研究成果の還元も期待できると判断する。よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。